

田中康夫

今月の憂いゴト

宗教改革500周年から、ローカル・ヴィレッジズ、コミュニティとソサエティ、憲法改正問題まで。

今回の憂国呆談は、特別バージョン。

哲学者・作家の東浩紀さんが運営する

東京・品川区の『ゲンロンカフェ』で開催。

東さんの司会で、ニコ生に動画を公開しながら、熱い討論が3時間にもわたって繰り広げられた。

「憂国呆談 ゲンロンカフェ出張版」での

田中・浅田・東氏の激論を凝縮して掲載！

photographs by Hiroshi Takaoka text by Kentaro Matsui

浅田彰

genron café



東浩紀

浅田彰

田中康夫

憂国呆談

season 2 VOLUME 85

キリスト教終末論で、人類は次のステージへ？

東 今日、「憂国呆談」ゲロンカフェ出張版」ということで、田中さんと浅田さんのおふたりにご登場いただきます。よろしくお願ひします！

浅田 よろしく。今年は宗教改革500周年。1517年にマルティン・ルターがカトリック教会の腐敗を糾弾する「95箇条の論題」をヴィッテンベルクの教会の門に貼り出した。でも、ラテン語だから一般庶民には読めない。むしろ、ドイツ語訳が活版印刷で流布し、プロテスタントイデオロギイの発点となった。その意味で、前世紀に活版印刷を発明してたヨハネス・グーテンベルクが存在が重要。ルターが後に出したドイツ語訳聖書も、活版印刷本のベストセラーとなる。考えてみたら、それまでは教会に手書き／手描きの装飾写本があるだけ、ミサで司祭が読み上げるけど、読経と同じで、ラテン語で聞いても意味はよくわからない。絵画や彫刻に彩られた壮麗な建築空間にステンドグラスから光が差し込み、宗教音楽が響き、さらには香を薫いたりして、宗教的法悦を感じる、これは一種の集団的マルチメディア・パフォーマンスだった。

ところが、グーテンベルクのおかげで、印刷された本を個人が黙読するようになる。私的空間にこもった個人が本の文字列をリニアに黙読して内面で理解し、そこで熟考したことをメッセージとして公的空間に発信し、それが相互検証・相互批判による熟議につながる。公私が峻別された都市つてのもそこで成立するわけ。ところが、マリーシャル・マクルーハンは、電子的マルチメディア・ネットワークが地球全体を覆

ったとき、そこに「グローバル・ヴィレッジ（地球村）」が成立すると考えた。ただ、マクルーハンの予想と違って、現実のインターネットは、地域別ないし関心領域別に閉じた多数のローカル・ヴィレッジズの分立に向かっている。むしろ、データ・ペースと検索エンジンの拡大・進歩によって、ほぼリアルタイムでの検証（ファクトチェック）もできるようになってきた。ただ、ドナルド・トランプ大統領の声高なツイートの含まれる嘘を検証しても、トランプ村に籠もり、マス・メディアは「フェイク・ニュース」だと信ずる支持者たちには、まったく響かない。閉じた村が共鳴箱（エコー・チェンバー）と化してそれぞれの思い



神秘思想家にたどり着く。彼は、キリスト教終末論の死者の復活みたいなことは科学的に可能だと考えていた。それが、マルクス主義が崩壊した後も残っていて、今、復活している。つまり、キリスト教終末論があり、マルクスの壮大な物語があり、それが冷戦終結で消え、なくなったと思ったその大きな物語がITの物語にチェンジした。思想的に見ると、ITの物語もキリスト教終末論の変形。ネットワークとコンピュータの力が高まることで我々は次のステージに行けると。カリフォルニアの大金持ちが死体を冷凍しているなんて不死の思想そのもの。

込みを強めるばかり。ポスト・トゥルースとかオルターナティブ・ファクトとかいうのはそういうメディア状況から生まれた。東 マクルーハンの思想はニュー・エイジ思想と結びついて、IT起業家になりに入り込んでいる。今、話題のシンギュラリティ（技術的特異点）の議論もマクルーハンの影響が強い。ネットワークの密度が高くなっていくと新しい秩序が創発し、人工知能が進展して2030年ぐらいに人類がオメガ点を超え、次のステージに行くという思想ですね。でも、たぶん人類は次のステージには行けない。歴史は反復されているから。この手の議論はさかのぼると、じつ

はニコライ・フォードロフという19世紀の

東 浩紀

あずま・ひろき●1971年東京都生まれ。東京大学大学院博士課程修了。『ゲロン』代表。『存在論的、郵便的』（新潮社）で第21回サントリー学芸賞受賞。2017年4月、『ゲロン0 観光客の哲学』（ゲロン）を刊行。



人間の頭脳。逆に言えば、AIで超えられない領域は今後も存在するわけで、「科学を用いて技術を超越する」という意識がAI時代ではより重要になる。なのに、「科学を信じて技術を疑わず」の思考停止状態な人たちは、現在の到達点を絶対ととらえて過去を振り返る「上から目線」に陥ってしまう。不治の病だったAIDSも現在は、HIVに感染段階で早期発見・早期治療すればかなりの確率で発症を抑えられるようになった。じゃあ、それまでの治療法は間違っていたのかと言えば、そうではない。その試行錯誤の段階があつて今日がある。

村上陽一郎が「科学史の逆遠近法——ルネサンスの再評価」（1982年）で提起したのは、そうした謙虚な相対化の視点だったのだけれど、魔術・錬金術・占星術といった中世のオカルト・サイエンスに市民権を与えてくれたと早とちりした連中が現れた。「国内平均よりも」数十倍多い甲状腺がんが発見された」が、「被曝線量がチェルノブイリ事故と比べてはるかに少ない」から「放射線の影響とは考えにくい」と今年3月に「中間報告」した福島県の「県民健康調査」検討委員会も、ある意味では同じ呪縛に取り憑かれている。

都市文化形成の失敗が、「コミュニティ」を生んだ？

東 原発の話で言うと、3・11以降、いちはん深刻な問題は歴史修正主義。あれは深刻な事故じゃなかったとみんな思い込もうとし始めている。そのとき我々にはいったい何ができるか。福島県沿岸の某地区は津波に襲われ、街が全壊した。その後、どうするか。街は全部、公園にしますと。津波が来るとまずいから砂浜を潰して防波堤にしますと。里山があつたけど切り崩して高台移転しますと。つまり、津波によって街が消えただけじゃなくて、その後は人の手によって浜辺も里山も壊している。普通だったらそんな復興計画は誰かが止めるんだけど、現地の人の話を聞くと、そこは広域自治体で全体のアイデンティティがない。小さな基礎自治体だったら自分たちの街をどうするかという議論ができたけど、今は広域になっていくから議論も雲散霧消し、市の方針だけでそんな悲劇が起きている。

すと総務省は喧伝したけど、一向に改善していない。しかも基礎自治体が大きくなればなるほど「論語」の「民は之に由らしむべし、之を知らしむべからず」が転じて、為政者は人民を施政に従わせればOKで、その道理を人民にわからせる必要はない、という具合になってしまふ。例えば、さいたま市のように4つの自治体が合併した人口100万都市の北西部に巨大な迷惑施設建設計画が持ち上がったって、他の3地域に暮らす住民にとっては関心外。その問題点をホームページで訴えることはできても、チラシを全戸配布するのは不可能だ。でも、人口2万人の街だったら十数人の有志で手分けしてチラシを配ることが出来る。街の図書館の運営をツタの絡まる会社に任せてゾッキ本で埋め尽くすのか(苦笑)、住民と一緒に司書がもっと努力して充実させるのか、あるいは建物を建て替えずとも耐震補強して活用すればいいじゃないかと、2万人の街なら議論ができる。

人口が日本の半分のフランスには約3万6000ものコミューンがあり、大きいことはいいことだ、とアメ車が根強い人気のアメリカにも州憲法で定められた自治体の数が約8万4000もある。それは非効率ではなく、60兆もの細胞が体内で小さな分子運動をしているから人間が機能しているのと同じなんだよ。経営工学と称する形式知を信奉する連中には理解不能だろうけど。浅田 今、個人と国家の間をつなぐものとしてコミュニティが強調される。国家の公助だけではやっていけないから、まずは自助を、それで足りない分はコミュニティの共助を、と。しかし、教育勅語を理想化するような血縁・地縁のコミュニティというのは、息苦しいしがらみの世界でもあった。

むしろ、コミュニティからはみ出したバラバラの個人が、近代のソサエティをつくった。ソサエティというのは、東さんの言う観光客の集団だとも言える。例えば、その地に骨を埋めるかはわからないけど、子育ての間だけはそこに暮らしてうちに、部分的に共同性に参与する、そんな人々の集団であって、最初から共同性を基盤とするコミュニティとは違う。その差を無視して、とつぜん「古き良きコミュニティを大切に」なんていうのは、反動的な幻想でしょう。

東 観光の起源を調べると、基本的にトマス・ス・クックで、1840年代、都市の出現や複製メディアの出現とほとんど同じ時代の観光客の文化は都市の文化でもある。観光の視線は世界をショッピングモールのように見る視線で、ある意味で残酷な視線だけど、ユニバーサルな視線でもある。いま京都と東京の都市文化を代表する方がここに座っておられるわけだけど、日本は90年代に都市文化を育てるのに失敗したんじゃないか。論壇的に見ても90年代から郊外論が多くなる。バブルで地価が高くなりすぎて

田中康夫

たなか やすお ●1956年東京都生まれ。一橋大学法学部卒業。大学在学中に『なんとなく、クリスタル』で文藝賞受賞。長野県知事、参議院議員、衆議院議員を歴任。最新刊は『33年後のなんとなく、クリスタル』。http://tanakayasuo.me

人々は郊外に逃げ、文化の中心も郊外に移っていった。

宮台真司の援助交際論も、渋谷のイメージが有名だけど、じつは議論の中心は都市じゃなく郊外。町田とか柏。宇野常寛なんかも郊外の価値観を打ち出している。90年代の日本が都市文化をつくれなかったことは、現実に政治でも利いてきている。日本は都市政党をつくれしていない。

憲法改正は、グローバルに考えるべき。

東 今、会場に来ている津田大介さんから憲法改正に関する質問が出ましたが？

浅田 じゃあ、東さんから。

東 えっ、僕？ うーむ。5月3日の憲法記念日に安倍晋三首相が「2020年を新しい憲法が施行される年にしたい」と発言したけど、日本の国民のメンタリティーとしてはいまだ「護憲対改憲」でしかない。それは嘆かわしいと思っている。条文がどんなものか関係なく「変える」「変えない」の選択肢しか議論されない。戦後「変えない」

を選び続けている日本人のメンタリティーが2、3年後に変わるとは思えない。僕は改憲派だけど、10年後も同じ議論が繰り返されているだけなんじゃないか。

次に首相改憲案について。9条の1項、2項に3項を加えて自衛隊を合憲化するという案は論理的に整合性がない。ただ、自衛隊を合憲化しないといけないという話は正当だと思ふ。現実に私たちの国が世界の中でもかなり大きな戦力を持っていることは確かであり、国民もそこに雇用されている。それが違憲状態にあることを放置してはいけないという意見にはまったく同意する。ただ、今の日本の政治状況においては、自衛隊を合憲化するのなら原発再稼働も賛成？ 豊洲移転も賛成？ と関係ないイシューまで連動する政治のパッケージがつくられていく。その状況だと国民も賛成できないだろうという感じはする。だから、現実的には、憲法改正案の発議にまでいって国民投票で否決されるんじゃないか。そしてそれは僕はいいいと思わない。

浅田 ぼくは原理的・長期的には1章改憲、天皇制をやめて、さしずめドイツやイタリアのような共和制にすべきだと思いつつ、右翼が9条改憲を狙っている状況で改憲論の土俵に乗るのは危険だと考えてきた。ただ、9条があるにもかかわらず、解釈改憲で軍隊がつくられ、海外に基地まで持つようになってる現状は、あまりにも危うい。事ここにいってからは、まともに改憲を考えるほかにないかな、と。その場合、自衛隊を軍隊と認めるなら、法哲学者の井上達夫が言うように、論理的には9条を削除するしかない。むしろ、9条を維持しつつ、戦争のための軍隊じゃなく、災害救助や治安維持に特化した消防・警察的な組織として自衛隊



すくシンプルに
言えば、
人を殺しに
行くのではなく
人を助けに
行く。(田中)

を再定義する手もあると思うね。田中さんの持論のサンダーバード隊みたいなやつ。田中 うん。現在の9条1項「国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する」の中で専守防衛に徹すると明確に謳ったうえで、自衛隊を位置づける。「陸海空軍その他の戦力は、これを保持しない」という現在の2項は、国外における天変地異の際、人命救助とライフライン確保のためにいち早く駆けつける。「サンダーバード隊」の規定に差し替える。東 護憲さえ掲げていけば安心だというリベラル側の戦略は、歪みが大きくてもう維持できない。これは解除すべき。小林節さんは一時期は改憲派だった。彼は9条に関して、自衛隊を戦力として認め、国際社会の支持があるときのみ戦力をと、そういう条件を入れればいいんじゃないかと非常にポジティブな提案をしていた。それが今は反安倍の運動に巻き込まれ、護憲派というわかりやすいレッテルのなかに自分から身を投じている。そういうのはよくない。反安倍という単純な運動方針を取ったりベラル側の責任でもある。

田中 国会の議論も、提言や助言、諫言かんげんという単語を使わずに「批判」と書き続ける記者クラブ・メディアは、憲法に関しても護憲、改憲という不毛な二項対立を、さらに9条だけの話に単純矮小化している。この前も、NHKが「憲法を護る人たちの集いがありました」とって報じてたけど、じゃあ、改憲派の集会は、「(現行)憲法を護らない人たちの集いがありました」と報じたらどうよ、って話でね(笑)。

東 チェルノブイリの原発事故で一番多く亡くなったのは、軍隊の兵士ではなく消防



近代のソサエティをつくった。(浅田)
コミュニティからはみ出したバラバラの個人が、文化の中心も郊外に移っていった。(東)

署員。もう少し一般市民に近い人たち。キ

エフのチェルノブイリ博物館は消防署を改装してつくられている。兵士は勲章をもらえるけど、消防署員にはノーケアだった。それで怒った人たちが、自分たちで原発事故の犠牲者を讃える消防署のなかで写真展をやり、それが育って今のチェルノブイリ博物館になった。大したものだと思う。博物館ができたのは事故から7年目。フクイチの事故から6年半ほど経っているけど、日本でそういう動きが出てくるかという点心許ない。

ただ日本は、9条を巡る神学論争から脱却できない国。僕より年齢の若い憲法学者の木村草太さんは、まさに神学的な護憲派。例えば24条に婚姻は「両性」の合意のみに基づいて成立するとある。これはどう見ても同性婚を不可能にしている。でも、木村さんは両性は必ずしも異性同士を意味しない、同性同士でも「両性」の可能性があると解説する。日本語を変えている。これでは議論ができない。こういうタイプの護憲学者が自分より下に現れたことに衝撃を受

浅田 彰

あさだ・あきら ●1957年兵庫県生まれ。
京都大学大学院経済学研究科博士課程中退。京都造形芸術大学教授。
83年に出版されたデビュー作『構造と力—記号論を超えて』はベストセラー。



けた。時代が変わるとそういう神学論争は消えて、現実的な議論が優勢になると思っていた。けれども違った。日本国憲法をそのまま守ればすべてがうまくいくという神学的な考えの人は、これからは絶対に出てくる。マスコミもそれを求めている。

浅田 もちろん、アメリカでもエドワード・スノーデンが曝露したようにNSA(国家安全保障局)をはじめとする「影の国家」が対テロ戦争を名目として超法規的に暴走し始めて久しい。バラク・オバマ前大統領もそれを何とか法的コントロールの下に置こうとして失敗した。いま、トランプ大統領の暴走にFBI(連邦捜査局)なんかブレイキをかけて喝采を浴びてるけれど、仮にも選挙で選ばれた大統領を「影の国家」が盗聴とリークで追い詰めるようにしてるのも異様だよ。その辺まで含めて考えれば、日本だけの問題じゃない。

東 近代は、国際的な暴力は軍が、国内の暴力は警察があたりることになっていた。グローバル化によって世界経済が結びついてしまうと、戦争と治安の境界がなくなっ

いく。そのとき、軍と警察の境界をどうするか。再定義しなければいけない。

田中 すごくシンプルに言えば、人を殺しに行くのではなく人を助けに行く。あるいは、人を不幸にする富国強兵でなく、人を幸福にする富国裕民。でも、阿鼻叫喚の中から救われた人もそれを当然だと「ずのぼせる」のでなく、謙虚な、ディーセントな気持ちを持ってこそ、供給側が好んで使う相互扶助という四文字熟語を超えた段階にいけるわけだ。

浅田 外交と戦争の前に、ユルゲン・ハバースやウルリヒ・ベックの言う「世界内政」の問題を考えないとね。消防や警察だけじゃない。徴税だって一単位ではもう無理。

東 根本的な発想のチェンジが必要。それこそ1648年のウェストファリア条約にまでさかのぼるような、ここ4、5世紀単位の国際社会の枠組みそのものを変えなければいけない。けれど難しい。ネーションを超えた価値をどうやって出せるかが大事。田中 誰もが自由に行き来可能なボーダレスと、それぞれの地域の習慣や言語や料理を尊重するボーダーコンシャスの統合を目指したはずのEUも、会議は踊るだけの政治家やEU官僚に人々が愛想を尽かす局面が続いている。とするなら、ソサエティであれコミュニティであれ、その中で「ささやかだけど、たしかなこと」を行って変えていくしかないんだよね。

東 実践としてはそう。ただ、どこか頭の片隅にネーションを超えた価値を覚えておかないと、どうしても排外主義になってしまう。というところで、かなり時間が経っているの、このあたりで終わります。ありがとうございます。